

「楽しさはどこにあるのか」

朝晩のみならず、日中も寒さが感じられる季節になりました。そんな中でも、大休憩や昼休みになると、子供たちは外へ出て飽きることなく遊んでいます。そのような子供たちの姿を見ながら、運動や遊びの楽しさや喜びは、子供にとってどんなところにあるのだろうと考えることがあります。

きっと、その楽しさの質は学年の発達段階によって違うのだろうと考えます。低学年（1，2年生）では、体を動かすこと自体に満足する幼児期から、自分がその運動や技ができるようになることに楽しさや充実感を感じるようになるのだと思います。つまり「できる楽しさ」です。例えば、友達が跳び箱を跳んでいるときに、それを見ている子供はどうしているかといえば、あまり集中して見ているとは言えません。自分の番がきて上手く跳び越せると、よい表情をしたり手をたたいて喜んだりしていますが、友達の跳ぶ様子に大きく興味を示すことはできていないと思います。統制のとれた集団だったり、教師の方であらかじめ友達の様子をしっかりと見ることを指導したりすると、外見的には見ているでしょうが、本音は「早く跳びたい。自分がやりたい」という気持ちでいっぱいでしょう。それが中学年（3，4年生）になると、人の目を意識するようになったり、人と比べたりするようになります。つまり「競い合う楽しさ」が加わります。これは、楽しさや喜びであると同時に、マイナスの感情を生む原因ともなります。もちろん、同じ学年といえども、発達に差が見られますので、どの子も同時期にこの段階に行き着くとは限らないようです。そして、もっと高いレベルの高学年（5，6年生）になると、苦手なことや上手くできないことに対しても、逃げることなく努力を積み重ねてできるようになるという「克服する楽しさ」が見られるようになります。ここまできると、運動の結果だけではなく、そこへ行き着くまでの過程を大切にできるようになります。また、ボール運動に見られるような「仲間と協力する楽しさ」も加わってきます。

ここに挙げた様々な楽しさを味わうようにしてやりたいと思うわけですが、前述したように同じ時期に同じような楽しさを追及しているわけではありませんから、それらの子供同士を関わらせることに難しさがあると思います。しかし、「この子は、今こんな楽しさを味わうことができた。こうした楽しさも意識させてやりたい」と指導者は意識的に子供の楽しさや喜び、充実感をとらえ、働きかけ方を変えていく努力をしていかなければならないと思います。

早いもので、令和6年も終わりになります。保護者の皆様、地域の皆様。寺家小学校を支えてくださり、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今後ともよろしく申し上げます。（校長 村杉 一也）